

2012（平成24）年度 京都大学 入試問題 理系 第1問 解答例

* 「私小説」の一部であると、出題者がわざわざリードで告知していることに注意。

* 単なる小説の読解にとどまらない、随想読解法を併用しよう。

問一

父親と海へ行くことを幸せそうに空想する二女の笑顔に、父親に寄せる夢と希望を感じ取り、病身の緒方は、幼い娘を残しては死ねないという束縛を覚え、嘆かわしかったから。

* 「ああこれは」（詠嘆）自体と、その指示内容である「幼女の笑顔・病む父親への夢と希望」による「がんじがらめ」の心情とを踏まえた答案であること。

問二

衰退した晩年の緒方が、自己の生死の理由や、そこから次々生じる種々雑多な疑問に納得できる答えを得ようと焦り、家族にも知らせず、自分一人だけで思考に耽る私的な内面。

* 小説問題の解答の基本中の基本として、「あせる」「納得したい」などの心情表現を極力活用すること。

* 傍線部の「誰にもものぞかせない」「小さな」「部屋（のようなもの）」をそれぞれ置換・説明できているか。

問三 *解答欄を五行から四行へと修正

緒方は、人間の生死の諸問題について、知的には当然のこととして一応理解しているつもりでも、他人事で実感がなかったが、病んで余命が短いという事実の際し、はじめて自分なりに痛感し、真剣に理解したい謎になったという事態。

* **時系列の誤り**に注意。「判り切ったことが判り切ったことでなくなった」という事態が生じたからこそ、緒方は「改めて見直す」のであり、さらにその結果、「新鮮であった」のであるから、傍線部の「事態」の内容に、「見直す」「新鮮」などは含めてはならない。

問四

父親や男としては、家族の期待に応じて生きようとする一方で、作家としては、作品の執筆に対する野心や欲求を保ちつつ、やがて死が訪れるときまで短気を起こさず堪え忍び、平静に持ちこたえて生きようとする、緒方の気負い。

* 「雄鶏」であるのは、「オス」＝「男・父」であるからであり、その「精神」とは「気負

い」である。「父親・男として」「作家として（私小説であるというリード文に注意）」「静かに持ちこたえて」いこうとする「緒方の・気負い（＝俺の・雄鶏精神）」。

*京大現代文の場合、随想からの出題が圧倒的に多いことから、そもそも「全体要旨」や、「そのように言える」論拠が問われることは少ない。「論」が完成していない段階での「想いに随う」文章だから当然であり、また、理由説明では「筆者がそのように言うのはなぜか。」と、「筆者（S）が言う（P）」際の主観的理由が問われるのも、そのゆえである。まして、今回のように小説で「論旨」などナンセンスであるから、「本文全体を踏まえて」と問われているのは、全体の要旨などを問うものではなく、「傍線部のあたり以外にも解答要素はありますよ」というヒントを出題者が与えてくれているのである。